

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18330105
 研究課題名（和文） 高等教育改革のコミュニケーション分析
 —現場における文化変容の質的検討—
 研究課題名（英文） communication analysis of university educational reform
 : on-the-spot examination
 研究代表者
 樫田 美雄（KASHIDA YOSHIO）
 徳島大学・総合科学部・准教授
 研究者番号：10282295

研究成果の概要：

ビデオエスノグラフィーという新しい研究手法を開発しつつ、実際の分析にも成果をあげた。即ち、大学生が専門技能を学ぶ実践の状況を相互行為の観点から明らかにした。例えば、医学部PBLチュートリアルにおいて、レントゲン写真をみる‘専門的’方法としての「離して見る」という技法が、教師から学ばれ、学生集団のなかで模倣的に獲得されていく状況が確認できた。教育を結果から評価するのではなく、プロセスとして分析していくことへの展望が得られた。

I S C A R 第2回サンジェゴ大会等で報告を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	5,100,000	0	5,100,000
2007年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2008年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
年度			
年度			
総計	14,500,000	2,820,000	17,320,000

研究分野：医療社会学・福祉社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学（3801）

キーワード：

エスノメソドロジー、会話分析、ビデオエスノグラフィー、PBLチュートリアル、工学教育、コミュニケーション、ワークプレース研究、ワークショップ

1. 研究開始当初の背景

研究の背景には、社会状況的側面と研究状況的側面がある。

まず、社会状況的側面から解説しよう。大学の大衆化と生涯学習社会化の進展にともなう、高等教育で用いられる教育手法は変

更に余儀なくされてきていた。具体的には、「大学のユニバーサル化」等の変化にともなう「学生の初期値の変化」と、「情報化社会の進展」等の社会の変化にともなう「大学教育の意味の変化」が基盤的事実としてあった。これらの状況変化があったため、20世

紀末以来、日本の大学は、エンターテインメント性と実践性を強く求める学生に対応せざるを得なくなってきた。また、数年で陳腐化する「知識」ではなく、学び続ける専門職人生の数十年間にわたって有効であるような「学習能力」をこそ与えるべき場所として、そのカリキュラムと教育技法を洗練する形で変革がなされざるを得なくなってきた。本研究は、比較的投資される教育資源が多い2種の教育現場（医学教育と工学教育）に拠点をおいて、その社会状況にあわせた変化の生の姿を把握するために構想された。

また、本研究の背景を、研究状況的側面からいうと、下記のようなことになるだろう。即ち、上記のような高等教育におけるイノベーションは、我が国の大学教育を大きく変えつつある基本的なトレンドであるにもかかわらず、教育方法の変化がどのような実際的な現場の変化を学生と教員にもたらしているのかに関する実証研究は十分になされていなかった。従来の研究はたとえばPBLチュートリアルを導入年次学生のペーパーテストでの成績（たとえば、医師国家試験合格率）を以前のそれと比較するものだったり、受講学生への調査紙法調査によって、学生の満足度を尋ねるものだったりしていたが、そのほとんどが事後的、あるいは、間接的な評価になってしまっていた。当然、これらの方法による調査では、教育の現場が実際にどう変わっていつているのかについての情報は十分には得られていなかった。したがって、十全な緻密さによって、教育現場の状況をなるべくそこで起きている事柄に直接関わるような形で研究する手法が開発される必要があった。このような研究状況的側面からも、本研究は構想されている。すなわち、医学教育および工学教育に関する実際の研究

遂行と並行して、ビデオエスノグラフィーという研究手法の開発をも同時に行い、その評価にも配慮した。

2. 研究の目的

本研究は、上記のような背景のもとで、以下のような形で構想された。すなわち、近年の「高等教育技法の革新」がどのような「学習現場の変容」をもたらしているのか、具体的には、どのような「教師－学生間」「学生－学生間」「学生－教材間」のコミュニケーションを生み出しているのか、もしそこにイノベーションと呼べるようなものが生じているとするならば、それはどのようなイノベーションなのか、というようなことを、エスノメソドロロジー・会話分析の立場にたった「ビデオエスノグラフィー」という新手法を用いて解明しよう、とした。

解明のポイントは2つである。ひとつめは、「PBL（プロブレム・ベースド・ラーニング）チュートリアル」に関して、「自学自習」の態度を錬成するために海外から移入された「PBLチュートリアル」のような新しい教育技法が、どのように「自学自習」を達成しているのか、あるいは、（思わざる効果として）「分担・助け合い型学習」を達成しているのか。

ふたつめは、「学習の実践性・総合性」を確保する観点から積極的になされるようになってきている、小集団による「フィールドワーク」が、実際にどのように「学習の実践性・総合性」を達成しているのか、あるいは、（思わざる効果として）「非実践的・非総合的な学習」になっているのか。これらのことを探求すべく調査・分析が設計・実施された。

3. 研究の方法

本研究の理論的・方法論的立場は、大きくいえば「質的調査」であり、中ぐらいの範囲で言えば、「状況的学習理論」および「エスノメソドロロジー・会話分析」に基づいたもの

であり、もっとも局域的にいえば「ビデオエスノグラフィー」である、ということになるだろう。

これらのうちで、もっとも我々の研究をよく特徴付ける言葉である「ビデオエスノグラフィー」について、以下少しくわしく説明をしておきたい。それは、当事者の理解を実際の相互行為に基づいて経験的に確認するための道具として「ビデオデータ」を用いることと、当事者参与の「ビデオセッション」を開催することによって研究に取り込まれる「エスノグラフィカルな知識」を存分に用いること、との2つのことの組み合わせとして、定義される。これらの2つの特徴をもった研究スタイルがうまく実行されるのならば、(従来の研究と違って)「発見された秩序」が「現場」とレリバンズ(関連性)を持っている、と強く主張できることになるだろうと思われた。

具体的には、150mbづつに自動的に切り分けられたmpegファイル(動画ファイル)を連続的に作成する「ハードディスクレコーディングシステム」を開発し、これを用いて、教育実践の動画撮影直後に、その教育スタッフを交えたビデオセッションを開催した。ポータブル型のノートパソコン、ポータブル型の液晶プロジェクター、ポータブル型のスクリーンなどが活用された。

4. 研究成果

おもな研究成果は以下のとおりである。

(1) PBLチュートリアルに関しては、まず、レントゲン写真をみる‘専門的’方法としての「離して見る」という技法が、教師から学ばれ、学生集団のなかで実践的に模倣されていく状況が確認された。

(2) PBLチュートリアルに関しては、ついで、板書係の「沈黙」とは裏腹な「リーダーシップ」の発見(各メンバーの発言を板書に取り込むか否かの部分で決定的な進行管理権の行使を「板書係」がしていること)の発見がなされた。このことは、PBLチュートリアルにおける学生の参加度評価(多くの

場合発言数で評価がなされている)を変える必要性にも繋がる重要発見であると、当事者参加教員に評価してもらえた。

(3) さらに、PBLチュートリアルに関して、学習者集団の「笑い」が、場面内で論じられていることの「公的な評価」を形作っていること、教員の「質問」と学生の「応答」との組み合わせが、精密に学習課題の位置価値を定めていく手続きになっていっていることなどが、確認された。そうじて、通常のチューターによる活動評価では漏れてしまうような、微細な相互行為レベルに支えられて、PBLチュートリアルとしての学習の質が確保されていることが明確となった。

(4) 工学的フィールドワーク研究に関しては、まず、教員側の期待以上の実践性(工学的知見に総合性を強く加味する方向での志向性)が、学生の相互行為の中で生まれてくることがあること、がわかった。

(5) 工学的フィールドワーク研究に関しては、ついで、けれどもそのような、発表時における、学生の共同研究での志向性は、フィールドワーク研究の現場では、かならずしも全員によって志向されていたものではなく、現場におけるモザイク性(多様性)こそ注目されるべきものであること、などが発見された。

(6) 方法としてのビデオエスノグラフィーに関しては、まず、ビデオデータの持つ情報量の多さと分析の新鮮さが、ビデオセッションへの当事者参加者の関心を強く引きつける場合があること、が発見された。

(7) ついで、方法としてのビデオエスノグラフィーに関しては、それが研究成果を裏付けのあるものにするすることで、場合によっては、実践そのものにも変革を迫るようなインパクトのあるものに研究をする力を持ちうること、が確認された。すなわち、その研究方法としての有効性・可能性の高さが確認された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

(1) 真鍋陸太郎、「野外グループ作業を伴う演習でのITツール使用の可能性—工学部都市工学科の都市工学演習を題材に—」、大学教育研究ジャーナル、査読なし、第6号、2009年、150—160頁、
<http://www.cue.tokushima-u.ac.jp/FD/journaldata/2009journal150-160.pdf>

(2) 五十嵐素子、岡田光弘、樫田美雄、宮崎彩子、「医学教育の問題基盤型学習における「介入」技法—導入段階の援助として—」、

教育目標・評価学会紀要、査読あり、第 18 号、2008 年、1-10 頁

(3) 榎田美雄、岡田光弘、五十嵐素子、宮崎彩子、出口寛文、真鍋陸太郎、藤崎和彦、北村隆憲、高山智子、太田能、玉置俊晃、寺嶋吉保、阿部智恵子、島田昭仁、小泉秀樹、「高等教育改革の相互行為分析ービデオ・エスノグラフィー研究の狙いと工学部都市工学演習の実際ー」、大学教育研究ジャーナル、**査読なし**、第 5 号、2008 年、93-104 頁、<http://www.cue.tokushima-u.ac.jp/FD/journaldata/journal2008kashida.pdf>

[学会発表] (計 9 件)

(1) 榎田美雄、岡田光弘、五十嵐素子、
「A normative order in medical education (problem-based learning): Use of whiteboard and its consequence on turn-taking organization.」、第 2 回 ISCAR International 大会、2008 年 9 月 11 日、カリフォルニア大学サンディエゴ校

(2) 宮崎彩子、出口寛文、米田博、阿部智恵子、岡田光弘、榎田美雄
「ビデオエスノグラフィーを用いた PBL チュートリアルコアタイムの分析ー『白板係』の『非言語的討議参加』の発見ー」、第 40 回 日本医学教育学会大会、2008 年 7 月 26 日、学術総合センター

(3) 榎田美雄、岡田光弘、五十嵐素子、宮崎彩子、出口寛文、真鍋陸太郎、「高等教育改革のコミュニケーション分析 (1)ー研究の狙いと工学部都市工学演習の実際ー」、第 80 回 日本社会学会大会、2007 年 11 月 17 日、関東学院大学

[その他]

ホームページ等

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/kasida/kaken/kaken.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

榎田 美雄 (KASHIDA YOSHIO)
徳島大学・総合科学部・准教授
研究者番号：10282295

(2) 研究分担者

寺嶋 吉保 (TERASHIMA YOSHIYASU)
徳島大学・大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
・准教授
研究者番号：20243686

玉置 俊晃 (TAMAKI TOSHIAKI)
徳島大学・大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
・教授

研究者番号：80179879

藤崎 和彦 (FUJISAKI KAZUHIKO)

岐阜大学・医学部・教授

研究者番号：60221545

出口 寛文 (DEGUCHI HIROFUMI)

大阪医科大学・教育機構・教授

研究者番号：90131341

宮崎 彩子 (MIYAZAKI AYAKO)

大阪医科大学・医学部・講師

研究者番号：20298772

高山 智子 (TAKAYAMA TOMOKO)

国立がんセンター・がん対策情報センター

研究者番号：20362957

太田 能 (OTA CHIKARA)

神戸大学・工学部・助教授

研究者番号：10272254

真鍋 陸太郎 (MANABE RIKUTAROU)

東京大学・工学系研究科・助手

研究者番号：30302780

五十嵐 素子 (IGARASHI MOTOKO)

光陵女子短期大学・国際コミュニケーション学
科・講師

研究者番号：70413292

北村 隆憲 (KITAMURA TAKANORI)

東海大学・法学部・教授

研究者番号：00234279

阿部 智恵子 (ABE CHIEKO)

石川県立大学・看護学部・助教授

研究者番号：80337427

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

岡田 光弘 (Okada Mitsuhiro)

国際基督教大学・非常勤講師